

(令和元年6月15日)

第34回 赤松小三郎研究会のご報告

日時： 令和元. 6. 8 (土) 14:00～16:30

場所： 東京・文京シビックセンター 5階 A会議室

出席者：20名

< 配布資料 >

資料—1 ●上田藩本郷御弓町屋敷について 栗山正雄氏作成

資料—2 ●「長崎海軍伝習所及び神戸海軍操練所・勝海舟の私塾及び築地の軍艦操練所とその後の日本海軍の発展について」 沓掛忠氏作成

資料—3 ●天武天皇の信濃遷都計画 沓掛忠氏作成

その他 ◆山形新聞記事～信州上田訪問記

◆赤松小三郎研究会 収支報告 (平成30年度)

< 内容 >

1. 「上田藩本郷御弓町屋敷について」(安政5年7～8月上屋敷、～明治4年中

屋敷、～明治5年藩知事官邸)・・・ 栗山正雄 氏

○現住所：文京区本郷4丁目6～8番(旧真砂町)、文京シビックセンター(西)と東京大学(東)のほぼ中間で、現在は男女平等センターや真砂中央図書館がある

○広さ：5千82坪、建坪は860坪余

○水利：千川上水が引かれていた

○敷地の推移：安政5年(1858年)忠固の老中免職により西丸下の上屋敷を上地→御弓町屋敷を上屋敷として拝領するも、手狭だったため、これまで中屋敷だった浅草瓦町屋敷を居屋敷(上屋敷)とし、御弓町屋敷は中屋敷として利用された。明治5年に手放す。

○幕末期の御弓町中屋敷：和宮下向時に江戸府内を通行する道筋の途上であったため沿道警備に当たった

(※資料—1の修正・・・P1冒頭の「現住所」の2行目最後

誤：、間を本郷通りが分断 →正：、間を春日通りが分断)

2. 「長崎海軍伝習所及び神戸海軍操練所・勝海舟の私塾及び築地の軍艦操

練所とその後の日本海軍の発展について」・・・沓掛忠 氏

- ・ 長崎、神戸、築地（江戸）の3カ所の操練所を見ていくと、幕府の海軍の興亡がわかる。
- ・ 一方、この3カ所の名称や移り変わりが、複雑で混乱しやすいため、本報告でまとめた。

(1) 長崎海軍伝習所

- ・ 安政2年（1855年）、幕府が海軍士官養成のために長崎に開設
- ・ 教師はオランダ人、オランダから贈られた観光丸を用い、近代的な海軍士官教育を実施
- ・ 約五年間の全伝習期間を通じ、合計200名以上の伝習生が入校し、のちに幕府海軍の中枢を担う数多くの士官が誕生した。
- ・ 何故、伝習所が長崎の地だったのか・・・①日本は西洋の国としては、当時オランダ1国のみと交易通商関係があった ②オランダから蒸気船及び教師（海軍士官養成教育）の提供を受けられた。
- ・ 顛末・・・安政4年（1857年）築地に海軍教授所ができ、主として長崎の多数の伝習生が築地に教員として移動するなどし、遂に安政6年（1859年）に閉鎖となった。

(2) 築地軍艦操練所

- ・ 安政4年（1857年）長崎と並立する形で、幕府が海軍教授所を江戸・築地に開設、長崎海軍伝習所第1期生の永井尚志が総督。
- ・ 後に海軍操練所と改称され、これ以降は海軍教育の中枢施設となる。
- ・ 何故、築地（江戸）だったのか・・・①長崎は江戸からあまりにも遠すぎた、また施設の維持に財政負担が大き過ぎた ②西洋式軍事技術の導入に消極的な彦根藩主の井伊直弼が大老に就任したことも影響した。
- ・ その後の改称 →軍艦教授所→軍艦操練所→軍艦所→海軍所→海軍学校→海軍兵学寮（明治3年・1870年）→海軍兵学校（明治7年・1874年）
- ・ 幕府の士官教育は、後の明治新政府の「西洋式海軍創建」に大きく貢献した。

(3) 神戸海軍操練所

- ・ 勝海舟（幕府海軍奉行）の建言により、元治元年（1864年）幕府が設置した海軍士官教育の施設。
- ・ 何故、神戸だったのか・・・大阪湾の防御拠点＝「大阪の背後の京都（朝廷）」をしっかり守る、という役割のため。
- ・ 但し、肝心の訓練専用の船はなく、幕府や諸藩から借りていた。
- ・ 勝は敷地内の更に600メートル離れた場所に「勝海舟塾」（勝の個人塾）を造り、

操練所で学ぶ人（幕臣・旗本・御家人・諸藩の推薦された者）以外の人（尊王攘夷の浪人たちも含む）に門戸を開いた。

- ・ ⇒勝の理想では、日本の「一大共有の財産としての海軍」（それは国民共有の海軍そのもの）を目指した。
- ・ 顛末・・・慶応元年（1865年）勝海舟が「操練所の中で、激徒養成をしているという嫌疑で江戸に召喚され幕府の調べを受けた後に免職」されたため閉鎖。（わずか10カ月で閉鎖）

3. 天武天皇の信濃遷都計画・・・沓掛忠 氏

- ・ かつて「信濃」が歴史上3回スポットライトを浴びて、日本の歴史の舞台に登場しそうになったことがあり、それについて紹介したい。

(1) 陸軍士官学校が佐久に移転

- ・ 陸軍士官学校は設立以来「市ヶ谷台」に存在していた。太平洋戦争の戦況悪化に伴い神奈川県座間「相武台」に移転した。
- ・ その後、更に激しい空襲を避け、「長期野営」の名目で、昭和20年6月、長野県佐久の本牧（もとまき）村を中心とした川西地方に疎開した。

陸軍士官学校は望月（もちづき）高等女学校（現在の望月高校）を本部とし、各隊は望月中学・各国民学校に駐留、教官将校は村内の民家に入居した。

⇒敗戦後の昭和20年8月31日まで佐久の土地に存在した

（本牧村・・・市町村合併により、現在は佐久市および一部が立科町）

(2) 松代大本営への政府・軍の中枢機能施設の移転

- ・ 太平洋戦争以前から、広い関東平野の端にある東京は、陸軍では、防衛機能が弱い地点と考えられており、松代への皇居、大本営、その他政府重要機関の移転施設工事が政府内において、検討承されていた。

⇒結局終戦となってしまい実現しなかった。

<松代が選ばれた理由>

- ① 本州の陸地の最も広い場所にあり、近くに飛行場（長野飛行場）があること。
- ② 松代地区は固い岩盤で、10トン爆弾に耐えることができる。
- ③ 長野県は、労働力豊かで、又県民の心は純朴で秘密が守られる。
- ④ 山に囲まれていて、地下工事をするにあたり十分な面積がある。

等々

(3) 天武天皇の信濃遷都計画（『日本書紀』に記載）

- ・ 天智天皇崩御後、壬申の乱を経て天武天皇（天智天皇の弟）が即位した。

- ・ 天武天皇は強力な中央集権体制を目指し、律令の作成、国史の編纂、宗教の国家管理等と共に、大規模な都の建設を計画した。
 - ・ 参考にしたのは、「唐の複都制」～長安を首都、洛陽をその陪都（両方の距離は約 350 km）→日本を、西国、中央部、東国に三分し、それぞれに都を配置、難波宮、藤原宮、信濃宮と考えていた。
- ⇒天武天皇の死により、複都制構想は、次の持統朝には引き継がれず、藤原京を唯一の中心的な中央集権的な、地方行政制度の構築が進められた。

<信濃が候補地にされた理由>

- ① 天武天皇が甥の大友皇子と争った時に、信濃から力のある豪族が天武天皇に味方して勝利に貢献した。
- ② 信濃は「牧」（馬の牧場）が非常にたくさんあり、しかも優秀な軍馬の産地として名高い土地であった。
- ③ 東国経営の視点から見ると、畿内の都から離れすぎており、東国対策としてその地の豪族たちの動きを警戒するため。
- ④ 東国の隣（外）は蝦夷が支配しており、蝦夷に睨みを効かすためにも東国の中心としての信濃が適地だった。（実際に別所温泉には、蝦夷討伐に力を発揮した坂上田村麻呂の碑がある）
- ⑤ 天武天皇が、唐の政治・軍事・都の造都等に関心があり、自ら日本国内において実践しようという強い考えを持っていた。

<信濃の何処だったか>

- ・ 天武 13 年（684 年）の記述では『日本書紀』編集者が、観測的ではあるが信濃造都について言及している。
 - ・ 天武 14 年（685 年）の記述には、行宮（あんぐう）を「束間（つかま）温泉」に造らしむ、とある。「束間」＝「筑摩」とすると松本平を指しているとも言える。
- ⇒研究者により「浅間温泉」「扉温泉」「美ヶ原温泉」などいろいろ取りざたされているが、現在に至るも場所ばかりか資料そのものも存在しない。また、「行宮は、天武天皇の療養のため」ではないかという意見もある。

以上

※事務局より

1. 8月の例会はお休みです。
2. 次回例会は10月12日（土）で、場所は未定です。
3. 9月28日（土）、岩下哲典教授の講演会への参加申込みは早めをお願いします。

（記録：荻原貴）